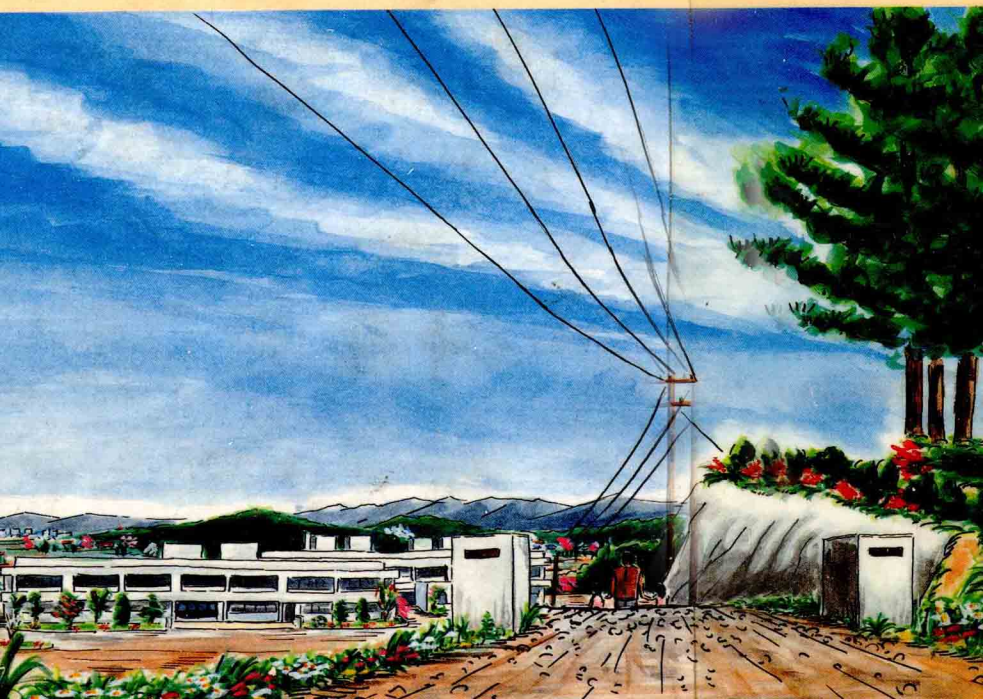
私の学校

姜 一生



私の学校

姜　一生

姜　一生（カン・イルセン）

1947年5月29日　福島県会津若松市に生まれる
1966年　朝鮮大学校英語科入学
1968年～70年　神奈川朝鮮高級学校教諭
1971年～81年　福島朝鮮初中級学校教諭
1980年6月から病気のため療養中

現住所　福島県会津若松市川原町6—29

私の学校　　定価 700円

1982年6月20日　初版第一刷発行
1982年9月20日　初版第二刷発行

著者　姜　一生
発行者　川上　徹
発行者　㈱同時代社
東京都千代田区西神田 2-7-6
電話　03—261—3149
郵便振替　東京8-60777
印刷　合資会社　光明社

生命（いのち）の書

李　恢成

ある日、姜一生さんの夫人と叔父にあたる方が私の家を訪ねてきた。

のっぴきならぬ感じで、一篇の原稿が、私の前に置かれた。

私は、事情を聞き、その原稿をおあずかりした。その晩、読んでみた。これは、小説であった。幼いところもあると思ったが、清新な筆遣いが生きていた。しかも、テーマがよかった。混血の朝鮮人教師を主人公にしてその生き方を追っているが、日本と朝鮮の谷間にあえぐ幼い魂にそそぐ愛情が人の胸を打って

くる。さらに朝鮮人社会の複雑な様相をたんたんとした筆致ながら、深くえぐっていて、それが静かな感動を誘う。

こういう地道なテーマの小説は、これまで在日朝鮮人作家がよく取り上げえなかったものだけに、これはひとつの収穫といえるものである。こういう小説の出現を、待ち望んでいた人々も多いのではなかろうか。

ある日、私は、姜一生さんを病床に見舞った。

病床に呻吟しながら、痛み止めの注射を打ちながら、姜さんはついにこの小説を世に送り出したのだった。

まさに、生命の書である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

生命(いのち)の書……李　恢成
プロローグ……三
1……七
2……二〇
3……六一
4……七七
5……九三
6……一〇四
あとがき……一二一

目次

生命（いのち）の書……李　恢成
プロローグ……三
1……七
2……二〇
3……六一
4……七七
5……九三
6……一〇四
あとがき……一二一

プロローグ

日本にある朝鮮学校は現在、初級八十六校、中級五十六校、高級十二校と、東京都小平市にある一校の朝鮮大学校を合わせると、総数百五十五におよぶ。

福島朝鮮初・中級学校は、最も新しい学校として一九七一年四月一日に創立された。

当時、郡山市内にプレハブ教室をつくり、初・中級合わせて四十九人の生徒と十一人の教員達とでスタートした学校は、同年九月五日、郡山市の郊外からだいぶ離れた、守山に新設された。

二千人足らずの同胞達が、福島県内に分散的にすむ条件と、学校が位置する地理的条件のため、初・中級学校としては全国でもめずらしく、初級一年から中級三年まで、全寮制の学校としてスタートした。

学校は、郡山駅から国道四十九号線を走り、村道への入口まで、車でおよそ二十五分、村道に入ってから山道を走って学校まで、三、四分かかる。電車になると少し面倒で、ちょっとしたハイキングになる。

郡山駅から水郡線に乗って二つ目の安積守山駅で降りる。十坪ほどの待合室を置いた木造の小さな駅の前には桜木が数本植わっており、いちばん太く枝振りの良い桜木の横には売店があって、あとは田園だけである。田園の中をまっすぐのびた道を歩いて行くと、この辺りではいちばん人家が集まった通りに出る。といっても、スーパーマーケットを真似たような店が一軒と、電気屋、薬屋、米屋など、必需品を売る店が数軒、古い人家の間にサッシ戸だけが店構え

を作って割り込んでいるだけである。

その一軒である酒屋を右にしてS字に歩いて国道のトンネルをくぐり抜けると、国道から折れた村道と交わり、あとは曲がりくねった上り下りの一本道になっていて、遠くにリンゴ畑がのぞまれる。

リンゴ畑を左手にして、百メートルほどさらに行くと、幅十メートルほどの川がある。川には、石橋が渡されている。いまは立派な石橋になっているが、当時は重量一・五トンまでの標識が人の目をひく危なっかしい木橋であった。

石橋を渡ると前方のなだらかな山道に沿って大供部落と人々が呼んでいる一握りの民家が見えるが、そこを通り抜けると道は険しい勾配にさしかかり、麦畑が上手に見える。麦畑の上に立ってみると、辺りは広い段々畑になっていて、左前方の林のそばに葡萄畑と桃畑がきれいに並んでいる。

雑木林は段々畑を囲んで、その向こうの景色を消し、歩くほどに少しずつ暗

い山道をつくっていく。

暗い山道に光が差し込んでくるかと思えるとき、左手に郡山市の一角が見え、安達太良連峰が美しく波を打っている。

振り返るといつの間にか山の上にいて、学校が山を切って真下に、意表をついたように建っている。

広い運動場と白い校舎が緑の中に、眩しく光って見える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

五月の空が突き抜けるように青く澄みきって、太陽が西の方に少し傾きながら白く輝いていた。

校舎の前の庭木に新芽が芽吹き、つつじも校庭の坂道に沿って、ようやくつぼみをふくらましている。

運動場の回りには雑草が思いのままに出揃って、咲き遅れた木蓮の花か一輪、雑草にまじってこぶしを開いている。

この天気ならば、いつもは子供達が、広い運動場を元気いっぱい駆け回って

いるはずだ。はつらつとした子供達のかけ声が山あいの中にこだましているはずなのだ。しかし、今はひっそりと静まり返っている。

子供達はそのときすでに午前の二時間目におこなわれた父兄の授業参観を終えて、明日からはじまる五月五日までの連休をたのしみに家路を急いでいた。

静まり返った校内の坂道を、さきほどから色あせたライトバンが一台、けたたましく行ったり来たりしている。校門までの坂道をいっきに登り、見えなくなったと思うと、また勢いよく下りて来る。

人里離れたこの地には電気も水道も引かれていない。そこで学校の子供達のために父兄が多額な資金を投じて、一キロほど離れた部落から電気を引き、水も部落の前を流れる川の横の水田に井戸を掘り、山の上へ通して来た。貯水タンクが運動場を見下す山の上に一つ、寄宿舎のボイラー室の地下に一つ、都合二ヵ所に設置され、いったん校舎と寄宿舎の屋上にある給水タンクに押し上げ

られて、それぞれ配水される仕組になっている。

この貯水タンクの操作と管理はいたって面倒であった。それにもってして、学校の周辺は、地下水が豊富でなく、学校、寄宿舎で使う水量にポンプの吸水量が伴なわず、ときどき水不足に悩まされる。それが年々ひどくなってきて、ポンプの吸水と同時にエアーが入り、配水管の水力を止めてしまう。そのたびにポンプ小屋の吸水状態を見たり、エアー抜きをしたり、貯水タンクを点検したりするために、何度も坂を行ったり来たりして、走り回らなければならない。

断水予報ベルは、英哲(ヨンチョル)がいる舎監室に設置されていた。それはとつぜん何十匹もの蟬が耳もとで一斉に泣いたようなけたたましい音で鳴り響く。その音が鳴り響くと同時に英哲は勢いよくライトバンのエンジンを吹かして、ポンプ小屋へと走って行く。真冬の夜中になると、この蟬は、何十匹どころか、何百匹もの大軍となって耳もとで羽根を鳴らし、英哲が潜り込んでいるフトンの中に

まで飛び込んでくる。

最近は予報ベルが鳴ってからでは処置が遅いので、あらかじめそれらを点検することが英哲の毎日の日課になっていた。

この数日間、晴天が続いて、そのために水不足になったのか、昨日も今日も断水予報ベルが鳴りっぱなしであった。

いま、英哲は、坂道を登りつめた校門の近くでエアー抜きをして、もう出て来るはずの水を待っていた。

見下すと、学校の回りや遠くの方まで春の緑が息づいて、眩しく目に映えた。

春風が緑を揺らして英哲の頬をなでていた。

「せ・ん・せ―い」（ソンセンニーム）

遠くから呼び声が聞こえてきた。

「せんせーい、まーだ。みず、まーだ」
〈誰だろう?〉英哲が声のする方を向くと、職員室の窓から誰かが身を乗り出している。
「英哲せんせーい」
職員室の窓から久美先生が着ているピンク色のチョゴリの紐が揺れて、長い髪が流れた。
英哲は、両手で×印を作って「まだ」だという信号を送った。すると久美先生は、乗り出していた体を半分引っ込めて、そのまま窓際から英哲を見ていた。
〈何んだろう?〉英哲は少し気にかけながら背を向けた。
それから五分も経たないうちに、シューッと音を出して、配水管から水がほとばしった。英哲は、エアー抜き用のコックを元に戻した。いつもならばその

ままボイラー室の貯水タンクへと車を走らすのだが、ついいましがたの久美先生の様子が気になって、英哲は職員室に取って返した。

「先生、ご苦労さん」

数人の教員の声がかかってきた。同じく久美先生が近寄って来て、

「先生、順伊(スニ)のアボジがまだ迎えに来てないのですよ。入院先の病院に連絡したら、四日間の外泊許可をもらって午前中に病院を出たらしく、会津のアパートに電話してもいないのですよ」

時計を見ると三時をまわっている。

「もう少し待って見ましょう。それにしても大丈夫かな、足が悪いのに」

「昨日電話がありましたのよ。知り合いの人といっしょに車で来ると言っていましたわ」

英哲が走り回っている間に、今日の授業の総括はすでに終わっていて、この

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com